台湾大学国際シンポジウムに参加して

――映画「セデック・バレ」・森於菟に及ぶ――

平岡敏夫

台北帝国大学――「旧帝国大学の一つ。一九二八年台北に設置、四五年敗戦によって廃止。施設は台湾大学に継承。」と『広辞苑』にある。台湾大学はフォーマルには国立台湾大学という。台北には国立政治大学もあり、これは蔣介石が開学したものである。数年前、国立政治大学大学院で日本近代文学の集中講義を8日間にわたって行なったことがあるが、今回は、国立台湾大学人文社会高等研究院（漢字は旧漢字）から四月中旬（2013）開催の国際シンポジウムの講演とワークショップの講義の招聘があった。テーマは「近代化における東アジアの伝統と新潮流への転換」である。

前に訪れたときは、設立当時のままの正門・大学広場から発する椰林大道に沿って、つつじが花盛りだった。その折はキャンパスをただ見学しただけであったが、今回は設立当時の面影をもっともよく伝える正門近くの校史館が会場で、楽しみにしていたつつじは盛りを過ぎて、残んの花がちらほら咲いている程度だった。「国立台湾大学校総区地図」によると、行政単位、教学大楼、生活・育楽、文学院、理学院、社会科学院、工学院、生命資源暨農学院、管理学院、其他単位、宿舎大楼、他に水源校区とあり、行政単位の校史館を1とするナンバリングは120以上に達している。

校史館中央の二手に分かれて昇る階段の壁面には、戦前・戦後の古い写真が一面に貼られている。二階には広い資料室があり、豊富な展示や説明のコーナーがいくつもあった。台北帝大時代からの歴史と伝統を保持しようとするもので、今回の国際シンポジウムのテーマ、「近代化における東アジアの伝統と新潮流への転換」とも関わってくるところがあるように思った。

台湾・韓国・中国・日本から10名の研究者が校史館に集まり、午前8時から午後6時半まで講演し、最後に全員で総合討論を行った。まことにハードなスケジュールであったが、講演者はそれぞれがきわめて熱心で、三ヶ国語が通訳も交えて会場に飛び交い、最新の知見にもとづく近来まれな充実、盛況ぶりだったと思う。

ここで演題・講者を列挙しておくと、(1)主題演講李光来（韓国江原大学校教授）東亜細亜の知形における東西融合の有形再考、(2)宮川康子（京都産業大学教授）歴史記述とナショナリズム―神話と歴史の間―、(3)李基原（韓国江原大学校研究教授）丁若鏞と荻生徂徠における「寛容」の技術、(4)平岡敏夫（筑波大学名誉教授）新たな近代文学史像と東アジアの問題―『佐幕派の文学史』から―、(5)銭国紅（大妻女子大学教授）東アジアにおける新文化の形成と儒教伝統―中国と日本の近代化を例として―、(6)松尾勇（天理大学教授）韓国現代社会における言語文化について、(7)竹村英二（国士館大学教授）江戸時

代における漢学の学問的発展―近代知性の基盤として―、(8)李梁（弘前大学教授）近世東アジアの伝統「知」とその変容について、(9)貴志俊彦（京都大学教授）二〇世紀における日本の対アジア通信の転換―「入亜」から「聯亜」への軌跡―、(10)緒方康（神戸大学教授）近代化と「アジアの想像」。以上10名のほかに主持人として台湾大学の教授、とくに日文系の太田登、辻本雅史の二教授が中心であった。

二日目は、台湾全国の大学院生約50名が参加、午前8時から午後6時まで、10人の教授全員が二会場に分かれて講義。講演とは異なるテーマもあり、院生が対象のせいもあって、より具体的に、個人的な心情もこめて語る教授も多く、熱気に溢れていた。私は佐幕派小説としての『坊っちゃん』を講義したのだが、『坊っちゃん』を読んだかの問いに挙手したのは20名中1名だった。

戊辰戦争という市民戦争（シヴィルウォー）（内乱）の敗者側がその戦後文学の担い手となったとして、東海散士『佳人之奇遇』の会津、明の遺臣の話から『国姓爺合戦』の鄭成功、共産党軍に敗れた国民党軍の台湾支配、そこから生まれた侯孝賢監督の映画「悲情城市」にまで話は及んだ。

台湾大学より帰って間もなく、早稲田大学大隈講堂で、一九三〇年の霧社事件を描いた「セデック・バレ」を見る機会があった。早大アジア研究機構主催・台湾研究所共催のこの上映は満員の盛況で、台湾中部山岳地帯の狩猟民セデック族が明治7年以来の日本軍、日本の統治、圧政に抗して戦うこの映画に大きな拍手が起こった。先住民を蕃人扱いする日本の警察官、日本名を名乗り巡査となっている先住民の苦悩。手放しで拍手できたわけではなかっただろう。

第一部「太陽旗」のみの上映で、そのあと、魏徳聖監督のトークがあった。切り立った崖続きの霧深い山地を、俳優たちがはだしで走りまわるのは大変だったらしいが、頭目モーナ・ルダオを演じたリン・チンタイの迫力には圧倒された。台湾先住民の人間、文化のすばらしさが豊かな大自然と共に見事に映画された。台湾にさえ今なお残るという偏見がこの映画によって打破されると思った。

五月に入って、第二部「虹の橋」を渋谷の映画館で見た。満席だった。擲弾筒、大砲、飛行機、毒ガスまで使用しての数千の日本軍の鎮圧に対して、わずか三百名ほどのセデック族が戦うその展開は迫真的だった。雨降り続く高地の密林の中を自在に駆け抜け、奪った小銃、機関銃等を用いて日本軍に反撃、日本軍に協力の他部族とも戦う、その戦いぶりは、映画としても高い水準に達していると感嘆した。

最後に頭目モーナ・ルダオは最愛の妻を撃ち殺し、絶対に投降しないと奥深く消えてしまう。彼こそはセデック・バレ、真の人の象徴である。誇り高いセデック族の精神は、この映画で明確に描き出された。終幕にくり返し流れる部族の讃歌は力強く、先祖の世界へと虹の橋を渡ってゆく姿を見よと若者たちに告げる。

国立台湾大学における国際シンポジウム「近代化における東アジアの伝統と新潮流への転換」は、まさに映画「セデック・バレ」が体現しているとも言えよう。

話はかわるが、このたびの台湾行きで私が思い浮かべていたのは、森鷗外の長男於菟のことだった。森於菟（1890-1967）は

昭和11年、東京帝国大学医学部助教授から台北帝大に赴任、解剖学教室主任、医学部長を勤めた。終戦後、台湾大学に招かれ、昭和22年帰国して、のち東邦大学医学部教授となった。

昭和35年夏前、私は日本近代文学会の運営委員として、ひとり於菟氏宅を訪問、例会で鷗外の話をしていただきたいとお願いした。於菟氏は座敷に正座して、大学院学生だった私に、たいへん丁寧に応対され、承諾して下さった。忘れがたい貴重な思い出である。その年の九月例会（9・24）で「鷗外思い出すまま」と題して於菟氏は語られた。具体的なことは何も思い出せないが、於菟氏にはいくつもの父鷗外に関わる随筆集があって、その一冊『森鷗外』（昭21・7、養徳社）の巻頭「鷗外の母」が強く記憶に残っている。これは昭和17年6月から10月まで、「台湾婦人界」に5ヶ月にわたって連載されたもので、祖母峰子と共に、亡き生母登志子の実家赤松家を訪ねるくだりには、今読み返しても胸迫るものがある。

現在の静岡県磐田市、そこに鷗外最初の妻、於菟を生んだのち離縁となり、他家に嫁して死去した登志子の父、海軍中将赤松則良男爵が住んでいた。「浜松で降りたのは人伝（ひとづて）に、もと幕臣の赤松男爵がこの辺徳川家にゆかり深い土地に隠棲して居られるときいたからであつたが」、むろん間違いで、また汽車に乗り人力車に乗り、日の暮れた畑中の重々しい屋敷門に辿りつく。

祖母の言い付けで、名前の肩に小さく第一高等学校生徒と手書した名刺を渡す。騙り者ではないかと生母の弟、当時京都帝大法科の学生で帰省中の三男盛三が応接する。登志子の母、祖母は「ほんとにあなたが於菟さん。ねえ盛三御覧、お登志によく似て。これではひとりで来ても見違ひはありません」と眼をしばたたく。祖母の「お登志さんもおなくなりなさいましたさうで」「はい、あれも不仕合せな事で」とのみ多く語らず、「則良もさぞ喜ぶことでございませう、さあこちらへ」――人情話の類と見えようが、以下は省略して、同書の「老年」、於菟ひとり再訪したときのスケッチに移ろう。体格のよい赭顔の老提督と一高の制服制帽だが中学生としか見えぬ虚弱そうな少年の姿が描かれている。この話は、昭和13年1月の「台湾時報」に掲載されたものだが、台湾で亡母とその父を思い起こしている於菟氏の心と筆にあらためて引き寄せられるのである。

さきの「鷗外の母」のなかに、「猶此際翁（赤松則良）と台湾との関係を付記すればその海軍少将時代、明治七年西郷従道中将都督の下に台湾征討に参軍として加はり、特丹社討伐には竹杜口司令官として海軍の陸戦隊を率ゐ、風港口司令官谷干城少将及び石門口の佐久間左馬太参謀と相並んで奮戦したのであつた」という一節がある。父鷗外も日清戦争より帰還後、台湾総督府陸軍局軍医部長を数ヶ月つとめたことがあるが、映画「セデック・バレ」が描いた日本軍と先住民との戦いの50余年をさかのぼる明治7年の鎮圧に、森於菟の母方の祖父が参加していたという事実が、その孫の台北帝大教授によって雑誌「台湾婦人界」で語られているわけで、映画に手放しで拍手できたわけではなかったのは、むろん私自身でもあったのである。